

III 先輩からのメッセージ

皆さんに期待すること

十年一昔（ひとむかし）といいますが、10年も経つと世の中が大きく変わってきていることを感じます。また、変化するスピードも以前にも増して速くなっている印象があります。それに伴って行政へのニーズも複雑化・多様化していますので、このパンフレットで紹介している部署や業務内容は10年後には今とは異なっているかもしれませんし、国家公務員の働き方も大きく変わっているかもしれません。

一方で、少子高齢化が進む中、厚生労働行政が担う社会保障政策や労働政策の必要性は、今後も変わらない、いや、むしろ国民の期待は一層高まり、重みを増しているように感じます。これら政策の企画立案などに当たっては、事例や体験といったエピソードではなく、科学的根拠としてのエビデンスが重要視されていますが、こうした知見もまだまだ不足しており、数学的素養を持った職員の役割はますます広がってきています。

（これから求められる力）

情報技術の進展とともに、多様で膨大なデジタルデータが集積され、いわゆるビッグデータもハンドリングできるような処理技術が開発されています。標本調査結果などから全体を推測するこれまでの統計手法に加えて、行政ニーズを定量的にとらえ、大量のデータを分析・解析し、対応案を提示しつつ具体的な政策の実現に導くといった手腕も求められてくると思います。複雑な数的処理業務が人工知能で代替されつつある中「統計的にこういう結果ができました」と提示するだけでは不十分で、計算・分析結果を読み解く力、結果の有用性を分かりやすく説明する力がこれまで以上に必要となります。

（多くの人に貢献できる仕事であるがゆえに）

中央省庁で働くということは、日本全国の人にたまねく貢献できる仕事を担えるというやりがいや魅力がありますが、多くの人の役に立つ仕事というのは、逆の見方をすれば、多くの人に多大な迷惑や損害を与えるリスクもはらんでいます。エビデンスに基づいて政策の立案・決定・実施・評価などがなされる中で、データの基となる統計調査や手法、結果に誤りがあった場合、その影響は極めて広範に及び、思いも至らない行政現場において想像を超える問題が発生することがあり、そのリカバリーにも甚大な労力とコストが伴います。数理職員の担う業務からのアウトプットは、厚生労働行政のみならず、地方自治体、エコノミスト、研究者、民間企業

などでも判断材料として利用され、様々な決断・実行の基礎となっています。その根拠に高い信頼が確保できるよう、責任をもって誠実に取り組むことはもちろん、顔が見えないからこそ、その先にいる1億2千万人の国民の人生に常に想いをはせ、目に見えないところで自分の示した結果が活用されていることに想像力を働かせながら、仕事に向き合うことが大切です。

（思い返せる初心を持とう）

厚生労働省の業務は国民の関心が高く、やるべきことはたくさんあります。時間が足りないと焦ることはあっても、退屈だと感じることはありません。注目が集まっている部署では、注目度に比例するように業務負荷も大きくなります。時折、何のために今の仕事をしているのかといった迷いが生じることがあるかもしれません。就職活動に当たっては、是非、これまでの自分を棚卸して自己分析を行い、こうありたいという姿を見つめなおしてください。後々思い返すであろう揺るがない初心、おかしいことはおかしいと言える自分の軸を持って、迷った時こそ、あらためて思い出してください。

（おわりに）

このパンフレットを御覧になって、興味を持たれた部分がありましたら、是非、数理職員の説明会等に参加してください。理工系の学問を追究した皆さんなら、きっとどこか同じにおいがするはずです。培った能力を自分のためだけでなく、多くの人を幸せにするために分かち合いたいと考える皆さんの御来訪をお待ちしています。

長崎労働局
労働基準部長 村木 幸広



＜経歴＞

社会・援護局保護課
老健局総務課
政策統括官付労働政策担当参事官室
政策統括官付参事官付雇用・賃金福祉統計室 等を経て現職